

Title	咸陽宮絵巻（翻刻）
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1993, 60, p. 37-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68856
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

咸陽宮絵巻 (翻刻)

翻刻した専修寺藏「咸陽宮」は卷子本二軸、桐箱に収められ、蓋には中央に大きく打ち付け書きで「感陽宮之絵 式巻」と墨書する。また、蓋右上には、朱筆で「十四」、右下には墨筆で「二百八十五」とする、それぞれ付箋が押される。軸に貼付された題簽紙は朱地、それに金泥、金砂子で雲霞、草花描、それに「かんやう宮 上(下)」と記す。天地三二・一センチ、表紙は金襴綴子、格子縞に笹等の文を繋ぐ模様。見返しは金箔布目。本文料紙は、鳥の子、それに金泥で松、小屋、草花等を下絵として描く。挿絵は、上下巻各六図。

翻字については、原則として本文通りの行数、かなづかい、用字とした。ただし、挿絵については横に長くなりすぎるため、一場面一カットとし、中心となる場面を示し、左右を省略せざるを得なかった。

かんやう宮 上

むかし大くりにかんやう宮と申ていかめし

き大里侍けりこれはしんのかうこうと

伊 井 春 樹

申人のはしめてつくり給ひし宮こなり
るすいのきたきうそうさんのみなみに
ありしゆへにかんやう宮とは申とかやひ
かしにはかんこくはんとてけはしきた
にをようかいとしみなみにはかうさんと
てか、たる山ありそれすなはちてんふ
の地なりよつてこのところにみやこを
つくり天下のゆうしふんしやをまねき
あつめはかりことをめくらしまつりこと
あらためくにをとましたみをさかやかし
六こくをほろほして天下をうは、んと
そたくまれのるそもく上古のいにしへは
世すなほにたみあつかりしうへせいしん
よに出て君となりしんとなりいつくしみ
をふかくしめくみをひろくして世をまも
りたみをあいし給ひしかはをのつからてん
かこくかここしなへにやすかりきしかるに

しうの代すくにかたふかんとせしころより
やうやくふんたうおとろへしよこうをのく
みをもつはらとしてたかひにさいしうの
心をふくんでくにをあらそひ世をはかりし
かはていわうの御まつりことたえはてたり
このゆへにせいのくはんこうしんのふんこう
なといふはわう出きて天下のけんへい
をとりしかはしうのみかとにてうするしよこ
うはなかりけりよつてつるにしんわうかん
わうきわうそわうえんわうてうわうせ
いわうかんくわをうこかしふたうをもつ
はらとしてせはきくにくをうちとりける
ほとに天下を七つにわけてその七わ
うしてたもてる七みかと、申はこれなり
せんこくの七ゆうと申もこれなりこの
時までもしうのみかとはわつかにしう
のくにしよをまもりておはしますす七
わうはたかひにかいしんをさしはさみ
六こくをほろほし天下をたいらけ四
かいをへいとんせんとおもはれければを
のくたかひにおそれをなしけいめい
をしていつはりなからんことをしめされ
けりくわいめいとふことはしよわうた
かひにいてあひてせいてうをなした
まふよしなり

(挿絵第一回)

こ、にしんわうしやうくんかはかりことを
もつてつるにいくさをおこしひかしの
かたにうち入てそこくの地をやふり千
里にあまりてきりとりけりこれによ
つて六こくのしよわうおそりおそれて
しきりにくわいめいしてしんをよはま
さんことをあひはかり給ふ是かために
ちんきてうほうをなけうち天下のち
しんをもとめゆうしをまねき侍るほどに
ねいえつしよしやうそしんとくなど云
ちほうのたつしやあつまりて日夜心ざ
しをはけましはかりことをつくしつ、
つるにこしそんしたいたいけいりやう
などいふ名しやうに百万きのつはもの
をあひそへいけんくんしゆしんくん
しんれうくんまうしやうくんこの四君を
大将としてしんのくにをほろほさん
ためにかんやう宮にそおもむきけるしん
わうこのよしを聞給てはつきもうてん
なといふしやうくんに五十万きのつはも
のをあひそへかんこくの関をひらきて
六こくのいくさをまねき入ふせきた、

かはしむる所にしんのいくさつよくして
六こくのた、かひやふれしかはうちほろ
ほざる、事かすをしらすち大河をなかし
てたくをた、よはしかはねはかうかくと
なつて行かよふみちもなしさる程に六国
のしよこういきほひすくにつきしかは
かさねてた、かはんちからなかりけり

(挿絵第二回)

あるひはほこをふせ手をつかね下臣と
せうしてしんにかうさんしあるひは地を
あたへ身かはりを出してそのなんをまぬ
かる、もありけりこれによつてしんわ
うぬせいよくつよくなりはしよく
のかためをやふりかうゆの地をさきと
つてつゐにしうのみかとをかたふけた
てまつるほうき九ていをうはひとつて
四かいをへいとんし侍りきさてしくはう
ていの御時に天下を三十六くにさた
めかんやうきうをおひた、しくひろ
けてたかさ三里の山をつきあけ
そのうへに大りをつくりてめぐり九千
里にはあか、ねのついちをつきかん
もんをひらかれたりしくはうていのおはしま

す御てんはあはう宮と申て東西五百
けんなんほく五町たかさ二十ちやう
なればやへたつ雲のうへなるへしそれ
よりきんもんまては三百里ありその
間にいすいといふ川なかれたり三百里
の間にはふたうと申てたかさ十ちやう
のらうかをつくり、けとうさいにす百
のくうてんをたてならへたりそのきれ
いしやうこんはいつれもをろそかならず玉
のいらかこかねのうつはりしろかねをも
つてたる木としあか、ねをもつては
しらとすにははしんしゆのいさこを
まき戸ほそは七ほうをちりはめた
りこれよりきたのかたにあたつてこ
うくと申てえひすのこはきくにあり
しくはうていやかてもうてんをつかはして
こひとを千里のほかにおひしりそけ
永代あんらくのためにとて一万里の
間にいしかきをして胡人をふせくよ
うかいとすそもくしくはうていと申は
せんきよくのみかとのこうぬんなりしん
のかうこうには七代のそんさうしやうわ
うの太子なりそのあせいこ、んにすく
れ給しかは四かいひとしくなひきおもん
したてまつる事まつたいにもありかた

かるへしこ、におめてしくはうの御こ、ろ
おこりくして今よりのち万世をよふ
まてわか御子孫とこしなへに天下をた
もち給ふへしされは世中にかんくわを

うこかす事あるへからす宮門けいこのふし
のほかはひやうくをもつことむやくなりとて
天下をことくかりてあらゆる所のふ
くをあつめらるやかてそのあか、ねをも
つて金人十二人つくりてゆうきんもんを
たてをかれけりいにしへ大こくにはほこ
つるきをもあか、ねにてつくりしとなり
その金人一つのおもさ千石なりとそ
聞えし

(挿絵第三四)

さてもせいのまうしやうくんえんの太
子たんなどいふ人ひとしちとなつてしん
にとらはれ侍しかまうしやうくんはいかに
もして今一たひほんいをとけはやと思ひ
つ、にはとりのなくまねをしてかんこく
のせきをたはかりとをつつるに本
こくににけかへりけりされとも太したん
はいまたしんにとらはれをかれてあけ
くれろうてうの雲をそふるうれへにし

つまかなしみ侍しかある時申されけるは
四かい一とうして君をおもんしたてまつる
うへはなにのあやふみか侍るへきわれに
しはしのいとまを給はれかしこきやうに
かへりらうほをいま一たひあひみたてまつ
らはやとそなけかれけるけいこの官人ら
そのよしをしくはうていへそうもんしければ
みかとあざわらつてのたまはくえんたん
われにいしゆをのこしてたはかるにこそ
まことにこまにつのおひからすのかしら
のしろくならんときあらはえんた人を
ほんこくにかへすへしとその給ひける
太しそのよしき、給て大きにたんそく
しあふきねかはくはあはれみをたれ馬
につのおひからすのかしらしろくなつ
てわれをいま一たひほんこくにかへし
てらうほにあはさしめ給へとかんたん
をくたきつ、天神地きをいのり給ふ
まことにほんてんたいしやくもかうく
のこ、ろさしをかんし給ふにや馬につの
おひてきんていいな、きかけりければ
きからすきうけつをとひかけりければ
しくはうこのよし御らんしてりんけんあせ
のことしくんしにたはふれのこととはなしと
てやかてえんたんかつみをゆるされ三

とせのいとまを給はつてほんこくへかへし
給ひける太子おほきによるこんでこ
きやうのかたへいそかせ給ふしくはうはな
をもいしゆふかくえんたんはほんこくに
かへしやらしとおほしめしえんのくにへ
ゆくみちにせんかといふ大河ありかの川に
そきやうといふ長きはしのありけるをさ
きたつて人をつかはししいたをふめは
はつる、やうにあやつりてたいしを河
水におとしいるへきやうにせせられける
さるほとに太子かしこにいたつてはし
をわたり給ふとき官人らあやまつて橋
いたをふみはつし太子を河中におとし
入たりけりされとも太しはみつにも
しつみ給はすへいちをあゆむかごとく
にしてむかひのきしにいたりつきて河
とをみかへり見たまへは大きなかめと
もかかうをならへてわたしけるこそふし
きなれこれはそのかみ太しのち、えん
わうしんけいをほとこしおほくのかめ
ともをたすけられしかそのはうおん
をほうし侍る成へし

(挿絵第四図)

日かすつもりく／＼てほんこくにかへり
つき給しかはらうほをはしめてきやうた
いしんるいまいりあつまりいさみよろ
こひ侍るもことほりなりらうほなくく
のたまひけるはわれかやうにおいおとろへ
あすをもしらぬありさまなれはこの世
にて太子にあひみんことかなふましと
あけくれ思ひなけきしに角馬白鳥
のきすいあつてた、今思ひまうけぬ
たいめんをとけ侍る事よろこひても
あまりあるへしてうるいちくるいたに
もあはれみをなしなさけをほとこし
ぬ人りんとしてそのおんをほうせさら
むやとてからすともをえをまきちらし
てあたへ給へはその中にかしらのしろ
きからす馬につの、おひたるあひまし
はりてえをはみけるこそふしきなれ
こ、に又けいかと申てたけつきつはもの
ありけりもとはせいにくにのものなりし
かえんわうのしんとくなるよしを聞て
まいりつかへたりかれ又ちしんゆうの三
とくをかねたるものなれはすなはち大臣
のくらゐにはいし給へり太子けいかをめ
しての給ひけるはわれしんのとらはれと
なつてきうこんにくるしむ事六か年か

のうらみこつすいてつしてしのひかたし
一たひふしきのきすいをもつてつみを
まぬかるといへともつぬにはこしうのなん
をのかるへからすざれはいかにもしてしんを
よはますへしやとの給へはけいかこのよし
うけ給はりおほせのことく御いきとせり
よきなしといへともつら／＼しんの有さま
をみるに四かいをたな心のうちに、きりて
るせいを一天にか、やかせるえんはそのつか
さとる事百ふん一にもよはずしいき
ほひ又おとろへたりまさにえんのすこし
きちからをもつてしんのかうてきをおひ
やかさんことかなふへからさるかしはらく時を
まちてはかりことをめくらさるへしと
ぞ申ける

(挿絵第五回)

か、りける所にしくはうていよりみことのり
を下さる、事ありあやしやなに事ならん
とみな／＼おとろき給へはえんのくにの
さしつならひにはんえきかくひをはねて
いそきていとにちさんすへしと也はん
ゑきといふものはしくはうていの臣下也
ほうを、かしたる事ありけるかあまりに

しんのはつときふければしそくのつみを
おそれてえんのくにをたのみてきたり
てしのひかくれて侍しをしくはうき、
をよひ給てか、るせんしをなし給ふ成へし
太子このよしきこしめし我をたのみてま
いりたるものをあへなくちうせん事み
れんなるへしいか、すへきとててんくほう
せんせいといふらう臣をめしてとひ給へは
せんせいしはらくしあんして申やうはん
ゑきすてに一天の君の御てきとして
かくのことくせんしをくたし給ふうへは四かい
の間に身をかくしをく事かなふへからす
臣つら／＼はかりみるにかのくひをうつて
一つのはこにおさめはこのそこにけんをか
くし入さうしをしてさ、けしめ奉らはしくはう
はたけきみかとなればすなはち出でたい
めんし給ふへしその時はかりたてまつるへし
と申せは太子このよしきこしめしこれこそ
しかるへきはかりことなれさらはなんちを
たのみ給ふへしとの給へはてんくほうか
いはくきりん一あしに千里をかける
といへともおいぬれはとはにもおとる
といへりわれわかくさかんなりし時は身つ
よく心たけかりしかともとし老侍れは
きりよくもとおとろへてしんたい

心にまかせすいかんとしたたのまれた
てまつるへしやとししければ太子よし
ちからなしかまへてこの事をひろうする
などのたまへはてんくほう大にはちてこ
の事もし世にもれ聞えなはわれをうた
かひ給ふへししよせんしをいたきよく
して太しの御こ、ろをやすめたてまつら
むにはしかしとていせんのすも、の
木にてかうへをうちくたき

しさつしけるこそ

ゆ、しけれ

太子このよし御らんして

なげきかなしみ

給へともかひ

なし

(挿絵第六図)

さて太子たんけいかをめしてその事
をくはしくかたり給へはさうなくりやう
てう申でけりやかてはんえきかしゆ
くしよにいたりてたいめんし申けるは
しくはうていより御へんのくひをとり
てたてまつるへきよしせんしによつて
太子のおほしめしたつ事ありいかなかず

へきとありければはんえき聞て大き
によるこひわれふせうの身をもつて
いかてかしくはうにちかつき奉りあをほ
うすへきや生前のめんほくか、るおほせ
をかうふるこそさいはひなれといひて
やかてつるきをぬきわれとわかくひを
かきおとしけいかにそ渡しけるあはれ
にたけきありさまなるへし

(挿絵第七図)

かんやう宮 下

さるほどにけいかははんえきかくひ
もたせてかへりけり太子にさ、けた
てまつりけり太子大きにかんし給
てさらはいそきかんやう宮にちさん
せよとてしゆのはこにそおさめられける
つきにえんのくにのさしつをうつしたる
ほうていは玉のはこにおさめ同じ
くけんけいをあひそへそのしたに
せんひつといふつるきをかくし入られ
たりさてさんたいにをよんでさしつ
のはこをはけいかちさんすへしくひの
はこをはしんふやうさ、けもつへし此
しんふやうはたけきつはものなりえめ

るかほはせをみてはえいしもなつき

いたかれいかれるおもてを見てはさうし

もおそれをの、くなれば此二人ほんまうを

とくへき事あんのうちなるへしと太子ふ

かくたのまれしもことはりとぞ聞えしざる

ほどにけいかしんふやうは吉日えらひかと

出してりよかうのみちにそおもむきける

しかうしてのち天へんあり白こう日

をつらぬけともとをらすと也太子このよし

御らんしてさてはこんとのむほんほいを

とくましきにやと心もとなくぞ思はれける

けいかすてにゑきすいといふところにつ

きてりよしゆくしけるにかうせなりと

いふことのめいしんなこりをおしみてこの

所までもに來りよもすからさげのみ

物かたりしことを引てなくさめけるかか

うせなりなく

風せうくとしてゑいすいさむしさうし

一たひさつて又かへらしとうたひつ、夜明し

かはたかひに名こりをおしみゆきわかれ

にけり又ゑつりよといふものはけいかに

あひしたかひしんわうにいるへきにてこの

所まできたりしか夜もすからふえをふ

きけるかそのふえの音ひやうてうにのみ

ひ、きけりえつりよひそかにけいかに

かたりていはくしくはうていはかねしやうの

人と聞えたり時また秋なればかねをつか

さとのへししかるに今宵よすから吹ふえ

のひやうてうにのみひ、きけるこそあやし

けれひやうてうはかねのくらゐなりし

くほうにはたすけおほく侍ればこんと

のむほんとけ給ふ事かたかるへしのち

にはかならず思ひしり給ふへしとてやかて

ゑきすいに身をなけてつゐにはかな

くなりけりけいかしんふやうこのよし

を見てあはれにあさましくは思ひし

かとも思ひと、まるへきみちならねはたけ

くいさむこ、ろにたよりとして

たひのみちにそいそき

ける

(挿絵第八圖)

えんのくにといふ所はしんたんこくの東

北のかたけいたんこくのさかひなりかん

やう宮までは三千里にあまれるみちの

ほとなればはるくのとあつみ松さむ

しては雲かうかくのあとをうつみ松さむ

ふしては風りよしのゆめをやふりつ、

あかしくらしてゆくほとに野くれ山くれ

さどくて名にのみき、ししんのくに
かんやう宮にそつきにける宮城のめく
り一万八千三百八十よ里とかや申せは
みやこのうちにいりても日かすはなをも
かさねけりたりはたかき三里のうへに
あれはかすみをわけ雲をよちてその
ほるへしざるほとにえんのつかひけいか
しんふやうはんゑきかくひをさ、けて
さんたいするよしそうもんしければしくは
うはこれにたいめんあらんためにりんし
のせちゑを、こなはれあはうてんにしゆ
つきよなる大しんけいしやう万官左右
にいねうしれい人かくをそうすしこくに
をよんでえんのつかひをきん中にめ
ざる両使をのくはこをさ、けてあは
うてんにのほるたかき三十しやうの玉
のきさはしをのほるときけいかはさき
にす、めともしんふやうはあしふるひわ
な、きてあゆみかねたりけいこの官人
らこのよしを見てないしんにやしんを
ふくむときはけしきほかにあらはるといへ
りくんしはけいしんにちかつかすとてしん
ふやうをと、めたりその時けいかちんし
ていはくせきれきになしつてきよく
えんをうか、はざるはりれうのわたかまる

所をしらすといへりしんふやうえんのく
にのいやしきへんとにむまれそたつて
いまたかくのことくいかめしくうるはしき所
をはみ、にもきかさりしところは今はし
めてめに見身にふる、によつてこ、ろお
くしつ、あゆみわつらふものなるへしと申
せは官人けにもとてとをしけり

(挿絵第九圖)

こらうのなんをのかれてあはうてんに
のほりつきぬくはうていはうんりうかく
の玉座におはします百くはんせん二万
人さうにいねうすけいかしんふやうしつ
かうとんしゆして二のはこを御まへにさ
しをきひらきつ、千しう万せいとかし
奉るしくはう御心よけにてみ給へはさし
つのにしたにこほりのことくなるつるきの
ひかりひや、かにみえしかはみかと大にお
とろかせ給て立ざらんとし給ふをけい
かしんふやうすきまもなくとひか、り
みかとのさうの御てにとりつきつる
きを御むねにさしあてけいかいかつて
申やう太子たんとしころとりこめられ
るいせつものくるしみにあひ侍るいこんつ

ぬにさんしかたしよつてそのあたをほ
うせんために臣らをつかはし給へりいまは
しこくうつし侍るへからすとてすてにさし
奉らんとす千万人のちしんまうしやう
なみゐ侍るといへともいかんともすへき
やうなしかいかにはつはものともひやうくを
たいしてなみゐ侍しかとも殿上にはひやう
くをもつことかたくきんせいなりしかは
大臣もけいしやうもむなしき手をあけて
あはてさほくはかりなりしくはうの給ひけるは
我まうほんゆふふのとくをもつて天下を
うちしたかへ四かいを手に、きるといへとも
うんめいすてにつきぬれはなんちらか手
にか、つてかいせられん事ちからをよはす
さりなからしはしのいとまをえさせよちん
かてうあいのきさきありその後のきんの
音をさいこにいま一と聞侍らはやとの給へ
はともかくもとゆるし奉るしくはう大きに
よろこひ給てくわやうふ人をめされしかは
ひやうふひとへのあなたなる木丁の
うちにきさきはいてさせ給ひてきん
をそひかせ給ひけるそもくこのくわや
うふにんと申は三千人のきさきの中
に第一のひしんにておはしますてんかに
ならひなきことのしやうすなれはとふ鳥

も地におち水魚もおとりいつるほどの
つま手を出し給ふにましてやいまはの
玉のをそとさこそは

ひ、きよくもつくさるら

めとしよ人み、

をそはたて

ける

(挿絵第十圖)

ひきよくさまくおほき中にくはんふ
らくといふきよくをひき給ふこそや
さしけれ是はたけきもの、ふの心を
やはらげんとおほしめさる、ゆへなるへし
花の春のきんきよくはくはふうらくに
りうくわえんりうくはえんのうくひすは
おなしきよくのさえつり月のまへのしらへ
はよさむをつくる秋かせ雲ぬにわたれる
かりかねことちにおつるこゑくもなみた
の露の玉つさ玉さかに人はよもしらいと
のしらめをあらためて君きけやく七せ
きのへいふうはおとらはこえつへしらこく
のたもとをもひかかなとかきれさらんほ
うしんはそんにえへりくんしんはせいしん
の御たすけとをしかへしく二三へんひき

給ふをしくはうていはきこしめされしかともけいかしんふやうはいかてかこれをき、わくへきた、きさきのきんの音にき、とれてたけき心をもうしなひてくはんくとしてねふれるかことくなりみかど此よし御らんしてかうせいゆうまうの御心をおこして二人かひかへたる御衣の袖を引きりつ、七せきのへいふうをゆらりととひこえてんくはうのけきしるよそほひあられのしら玉万里おちてらんかんをはしるこ、ちしてあか、ねの御はしらにたちかくれさせ給ひけりけいかおとろきいかりをなしつ、もちたるつるきをなけかけ奉るおりふしはんのいしかふたんといへるものくすりのふくろをなけかけたりければつるきはふくろをなけかけられなから口六しやくのあか、ねのはしらをなかははかりつらぬきけるあやうくあさましかりけること、も也

(挿絵第十一図)

それかうりうはしんえんのそこにあそへともせんしよにいてぬれはかならすこうきよのうれへにあふといへりしくはうてい

かたしけなくも十せん万せうのたつとき御身をもつてへんちてきこくのけいしんにちかつきすてに御身をあやふめんとし給へるこそうたてけれさてけいかしんふやうらをは官人ともすきまをあらせずとりふせければくはうていみつから御つるきをぬきけいかをもしんふやうをも八さきにしてすて給へりその、ちわうほんといふしやうくんにす十万さきのつはものをあひそへえんのくにをせめさせらるえんの宮こはけいしやうといふところなりいくさやふれしかは太子丹はつるにえんすいと云所にしてうたれ給へり此時にあたつてきわうそわうかんわうてうわうせいわうもみな一とうにせめほろぼされて天下一とうの御代となりしかは上下万世をとなへけり

(挿絵第十二図)

さるほどにみかとは太さんへのほらせ給てほうせんのまつりを、こなひ給ふ千万人のさいしやう官人みなくくふし侍れはいかめしきことなるへしみかとは山のたかねよりはるかのかい上をてうはうし給へは

かい中にすこしき嶋のごとくなるものろう
くとしてかすかにみえたりあれはいかなる
ものそととひ給ふに左右の大臣をはしめ
てけいしやう官人らあへてそれをしるもの
なかりけりしよふくといへるたうしかたはらに
侍しか御まへにす、み出てあれこそせん人
のすみ候なるほうらいはうちやうえんしう
といふ三つのしまにて候と申すみかど此
よしきこしめしほうらいの嶋にはふうらうふ
しのくすりありといふはまことかと、はせた
まへはさん候かのしまにはふうらうふしのくす
りをふくし候ゆへちやうせいをたもち候
と申すみかとの御心には一てん四かいの主
として万せうのほうるをたもち給ふと
いへとももとよりうたいの御身は御心にまか
せぬことをふかくなかせ給ふなればかの
くすりをえてちやうせい万せいをたもち
たはやとおほしめしつ、やかてしよふく
をかの嶋につかはしてくすりをもとめさ
せらるへしと也ほうらいといふしまはむかし
よりをとにのみ聞いていまためにみたること
なししかれともありのま、にそうし奉り
ぬれば今た、とかく申ことはなくしてす
てにしよふくはほうらいのしまにおもむ
きけり是かためにれうとうけきしゆの

舟をつくりとうなんくはんちよとてとし
いまた十さいはかりなる男子女子をえらひ
くくして三千人舟にのせたりそのほかきん
くくしゆきよくさんかいのちんふつくく
とのくわしを山のごとくにつみかさねたり
にしきのもつなをときかつらのかち
を立てしゆんふうにほをあげふなはた
をなんかいのにしにた、きつ、まんくたる
うなはらにこきいてたり

(挿絵第十三回)

えんすいはうくくとしてもとむるに所
なし風かうくくとしてまなこをうかち
ぬればほうらいをみすはあへてかへらし
といひしとうなんくはんちよもいたつら
に舟のうちにておいぬらんとそきこえ
ける

web公開に際し、画像は省略しました

(第一図)

(第二図)



web公開に際し、画像は省略しました

(第三図)



(第四図)



web公開に際し、画像は省略しました

(第五図)

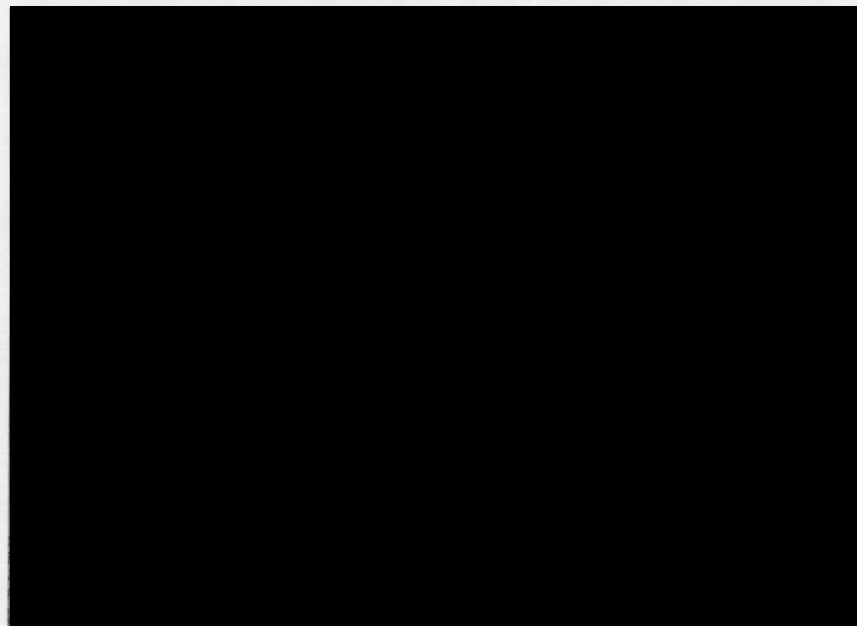


(第六図)



web公開に際し、画像は省略しました

(第七図)



(第八図)



web公開に際し、画像は省略しました

(第九図)

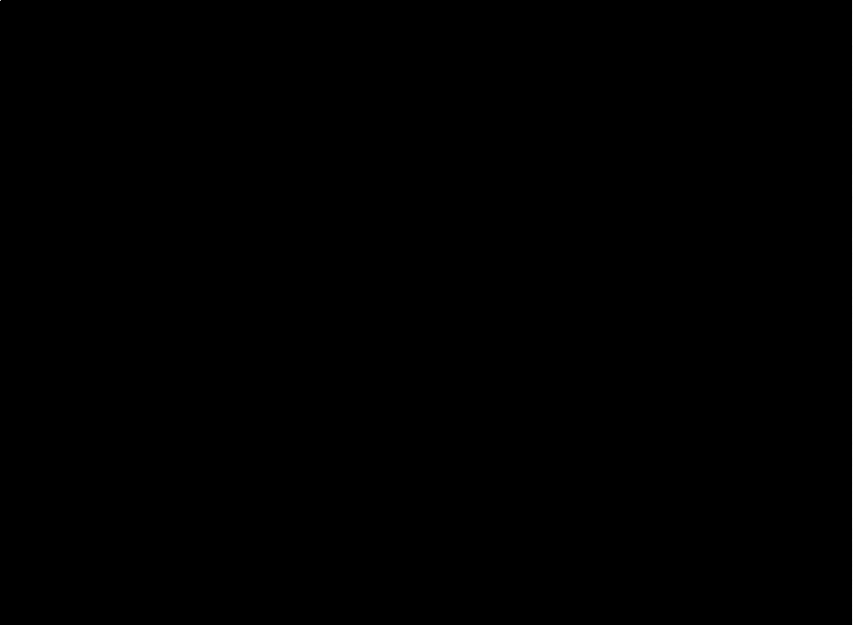


(第十図)



web公開に際し、画像は省略しました

(第十一図)



(第十二図)

web公開に際し、画像は省略しました

(第十三図)